

35

18-19世紀ベトナム産肉桂の流通からみた
東アジアの生薬交易岡田 雅志¹⁾, 内野 花²⁾¹⁾大阪大学大学院文学研究科, ²⁾大阪大学コミュニケーションデザイン・センター

クスノキ科のケイおよびその他同属植物の樹皮である肉桂は、独特の甘い芳香があり、発汗発表薬の代表的な生薬として、使用されてきた。中国南部やベトナムに自生し、栽培されてきた常緑の高木であり、なかでも、ベトナム産肉桂は良質のものとして古来珍重され、現在でも世界各地で多量に売買されている。タインホア産（清化桂）、クアンナム産（広南桂）などが知られており、現在もベトナムでは、タインホア省・イエンバイ省・クアンナム省・クアンニン省などを中心に栽培されている。

古くは『神農本草経』巻1上経に、

牡桂 味辛，温。主上気咳逆結気，喉痺吐吸，利關節，補中益気。久服通神，輕身不老。生山谷。
菌桂 味辛，温。主百病，養精神，和顔色，爲諸薬先聘通使。久服輕身不老，面生光華媚好，常如童子。生山谷。

とあり、「牡桂」「菌桂」の名で記載されたのが肉桂に関する中国最古の本草書における記載であり、この後も肉桂は本草書に名を連ねつづける。

『名医別録』巻1の上品には、肉桂は「菌桂」「牡桂」「桂」の3種に分類され、菌桂の項に、

生交趾，桂林山谷巖崖間。

とあり、現在のベトナムで古くから栽培されてきたことが判断できる。無論、薬能としてあげられているものを見ると、現代と同様、発汗・発熱・解熱・鎮痛・健胃・駆風・矯味などの薬効を恃んでいることも読み取れ、その効果が経験的に実証されていたことも容易にうかがい知ることができるのである。

その形状や生産地、薬能や伐採方法などが歴代の本草書に記載されつづけた肉桂は、生薬の歴史とともに歩んできたといっても過言ではない。東南アジアについていうと、ヨーロッパ向けの香料貿易が主体であった14-17世紀半ばの「交易の時代」においては、肉桂はシャムの輸出品として知られており、原産地である現在のベトナム・ラオスの国境のアンナン山脈に連なる山塊中からランサーン王国を経てアユタヤに送られ、そこから海外に積み出されていた。ヨーロッパの不況による香料貿易が事実上の終焉を迎えた17世紀半ば以降では、肉桂はベトナムの主要輸出品として東アジアの生薬原料の市場に向けて流れていくことになる。

このような東アジア市場における肉桂需要の高まりを受け、18世紀になるとベトナム政権（ハノイの黎朝、フエの広南阮氏）は生産・流通の管理を強めようとするが、中国人が原産地に入り込み、在地の少数民族首長と手を組んで内陸ルートを利用した密貿易を行ったため、成功しなかった。しかし、19世紀に阮朝が成立（1802）すると、ベトナム政権による肉桂産地を含む内陸山地地域への支配が拡大し、生産・流通の管理に一定程度成功したのであり、国家の主要産品として、肉桂はさらにその地位が高まっていったのである。

ベトナムから各国へ輸出された肉桂が、東アジアで殊更に重宝された背景には、肉桂の薬能のみならず、疾病の流行も指摘できる。医療技術・体制の整っていない当時において、感染症が死因の第1位であり、その感染症への治療薬として肉桂は多用されていた。これは道修町文書の江戸売買や『唐蕃貨物帳』、『華夷変態』に代表されるような生薬流通関係の記述からも、また当時に編纂された医薬学書に記載された治療薬のなかに、肉桂が多用されていることから読み取ることができるのである。